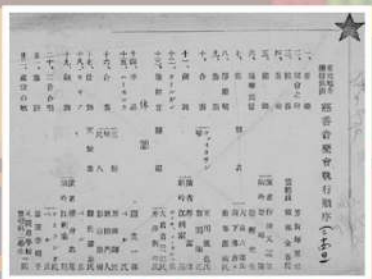
大学文書館へ行こう

第21回「文化活動の広がり」

北海道大学大学文書館　井上　高聡



慈善音楽会プログラム（1903年3月24日）

文化活動の始まり

外国人教師や海外留学を経験した卒業生などが持ち込んだ西洋の文物は、好奇心旺盛な札幌農学校生の手を経て、札幌の街や北海道各地に広がっていきました。キリスト教信仰、運動会、各種スポーツ、文芸、美術、音楽などの文化の起点は、札幌農学校であったと言えます。

文化活動では、早い時期から農学校生が演説会・講演会・講話会などを盛んに開催しました。札幌農学校初代教頭W・S・クラークは弁論術を重視し、カリキュラムに「能弁学」(Elocution)を加えました。また、クラークの肝煎りで農学校生たちは「開識社」を結成し、カリキュラム外でも週一回、弁論・討論・対論の集会を開催しています。一八九二年には予科生が中心となり「学芸会」を結成して演説会などを開催し、また、機関誌『蕙林』(後に『学芸会雑誌』と改題)を発行して、学術論考、論説、紀行、小説、詩歌などを発表しました。会頭の新渡戸稲造教授の指導と影響の下、活発に活動し、数年後には全校生徒が会員となるほどの文芸活動団体となりました。

一九〇一年、学芸会は体育系団体「遊戯会」と合併し、校友会的な性格を持つ「文武会」を結成しました。文武会では、演説会・遊戯会・遠足会などを開催し、『文武会雑誌』(後に『文武会会報』)を発刊するほか、下部団体として撃剣部・柔道部・弓道部・庭球部・野球部・スケーチング部を置いて、公認部活動の統轄団体としての役割も果たしました。

チャリティー演芸会

文芸以外の文化活動は、別の形で広がりを見せます。一九〇三年二月二十四日、前年の東北地方の農産物大不作を受けて、札幌農学校寄宿舎が主催し、「東北地方饑饉救済慈善音楽会」を、札幌座(南七条西三丁目)で開催します。プログラムは、剣舞、琵琶・琴・三絃・尺八などの和楽器、ヴァイオリンなどの洋楽器、能、狂言、浄瑠璃、手品、落語と、多彩な演芸会といった内容です。能や和楽器には本職の師匠連が加わり、浄瑠璃・狂言・落語などを札幌の商工店主たちが演じました。ヴァイオリンを北海道師範学校の音楽教員、オルガンは札幌農学校英語教師を務める宣教師ポール・ローランドが演奏しています。そして、剣舞・手品・尺八などは札幌農学校生が演じました。当日の「恵迪寮日誌」には、入場者が二三〇〇名に及び、「音楽ノ高尚、能ノ優美」、「演者ハ皆ナ札幌屈指ノFine Gentleman & Lady」、「聴者ハ水ヲ打チタル如ク静寂ナリ」と記しています。好評のため翌二十五日にも追加公演を行なっています。以降も札幌農学校の有志がこうしたチャリティーを開催します。

美術部「黒百合会」（1920年代後半）

美術・音楽活動の展開

札幌農学校が大学に昇格した翌一九〇八年、予科生藍野祐之と原田三夫が中心となり、予科助教授有島武郎なども加わり、絵画愛好団体「黒百合会」を結成しました。「黒百合会」の命名は本科一年生の小熊捍(後に農学部教授)です。十月二十五日に第一回スケッチ展覧会を開催し、水彩画を中心とした二百点以上の出品を約五百名の入場者が観覧しました。『文武会会報』掲載の記事には設立経緯として、大学では文学趣味は盛んであるが絵画の方面は立ち遅れていることを上げています。黒百合会は以降、毎年美術展を開催していきます。

一九一五年二月十四日には予科英語教師P・ローランドが指導する農科大学グリークラブが農科大学図書館で第一回音楽会を開催しました。大学教員・学生からなるグリークラブが披露した合唱には、宮部金吾教授や森本厚吉助教授も加わりました。他にピアノ、マンドリン、ヴァイオリンなどの演奏も披露しています。その後、合唱団、オーケストラ、マンドリン合奏団が活動を繰り広げます。

こうした活動を経て、一九二四年六月一日に文武会の下部組織として音楽部が、一九二五年九月十七日に美術部がそれぞれ成立し、大学の課外部活動として定着してくことになります。

音楽部内のマンドリン部（1929年）